

23. 化学療法の治療効果判定にガリウムシンチグラフィが有用であった
Rhabdomyosarcoma の1例 久米 典彦他 ... 716
24. ^{99m}Tc -2-methoxyisobutyl isonitrile (MIBI) シンチグラフィによる平滑筋肉腫の
放射線治療および化学療法の治療効果の評価：MRI との比較 玉田 勉他 ... 716
25. 頭頸部悪性腫瘍における ^{67}Ga SPECT の有用性 西山 佳宏他 ... 716
26. 甲状腺癌の転移性病変の ^{131}I 治療と血中サイログロブリン値との関連 刈谷 真爾他 ... 716
27. ^{99m}Tc -MIBI による甲状腺癌転移巣の検索 原田 義弘他 ... 717
28. 結節性甲状腺腫の鑑別診断における ^{201}Tl と ^{99m}Tc の2核種
シンチグラフィの有用性に関する検討 奥村 能啓他 ... 717

一 般 演 題

1. 脳主幹動脈狭窄症の治療と SPECT

難波 克成 目黒 俊成 坂井 恭治
萬代 真哉 合田 雄二 櫻井 勝
松本 祐蔵 (香川県立中央病院・脳外)

〔目的〕中枢神経疾患においては CT, MRI などの形態学的画像診断が主流となっているが, SPECT による脳の機能的検査法も形態学的検査法の相補的役割を果たすものと考えられる。今回われわれは脳主幹動脈狭窄症の治療について SPECT の有用性について検討したので報告する。〔対象〕1990 年 1 月から 1995 年 4 月まで当院で治療した脳主幹動脈狭窄症 62 例のうち手術前後に SPECT を施行し, 手術前後における脳血流の変化が評価可能であった 16 例を対象とした。〔結果〕内頸動脈狭窄症 11 例のうち SPECT 上血流の増加を認めたのは 3 例であった。中大脳動脈 5 例のうち SPECT 上血流の増加を認めたのは 3 例であった。〔結語〕SPECT による血流評価は不安定な要素があり, 今後の発展が期待される。

2. 内頸動脈狭窄症における手術前後の脳血流量

高杉能理子 足立 吉陽 吉野 公博
藤本俊一郎 西本 詮
(香川労災病院・脳外)
児島 完治 (同・放)

頸部内頸動脈狭窄症 12 例に IMP スペクトを行い, 局所神経症状, 血管撮影や CT, MR の所見と血栓内膜剥離術前後の局所脳血流の変化を検討した。神経症状の見られなかった症例の狭窄率は平均 55% であった。頭部外傷の既往のある 1 例を除いて梗塞巣はみられず, 局所脳血流の低下も, 術後血流の増加も認められなかった。神経症状を有した症例の狭窄率の平均は 82% であった。全例梗塞巣を認めたが, 狭窄の強い症例ほど CT, MR 上の低吸収域よりも広範囲に血流が低下していた。また術後神経症状が改善するものに血流も増加する傾向が認められた。

3. 橋梗塞における cerebellar diaschisis

津田 能康 綾田 好秀 泉 佳成
市原新一郎 細見 直永 松尾 裕英
(香川医大・二内)
川崎 幸子 田邊 正忠 (同・放)

目的：橋梗塞において小脳半球に生ずる cerebellar diaschisis の発現とその持続を検討することを目的と

した。

対象：平成2～4年にMRI画像上、橋梗塞と診断された6例(平均65歳)を対象とした。神経学的症状として5例はmildな片麻痺症状や知覚鈍麻を、1例は頭重感、目まいのみを訴えた。梗塞部位はすべて橋上部で、5例では橋底部に、1例では橋被蓋部に病変を認めた。

方法：局所脳血流、小脳血流の測定は5例では発症後急性期に(平均0.7か月)、3例では慢性期(平均14.8か月)に ^{123}I -IMP SPECTにより行った。大脳半球、小脳半球おののくに設定した左右対称の関心領域において半定量的局所脳血流量測定の指標としてasymmetry index (AI: %)を算出し、明らかな脳病変を認めない健常成人例5例(平均61歳)でのAI(2.6±1.7%)との比較検討を行った。

結果：6例中の5例に、4例では急性期に、1例では慢性期に、橋梗塞の対側(n=4)および同側(n=1)小脳半球に健常成人例と比べ有意な小脳血流の低下を認めた(AI: 6.3～13.7%; $p < 0.01$)。急性期にcerebellar diaschisisを認めた3例中の2例では慢性期にも持続してcerebellar diaschisisを認めた。小脳半球の血流低下に対応するような小脳症状、その他の神経学的所見はいずれの症例においても認められなかった。

結論：橋梗塞により錐体路、皮質—小脳—橋路が障害された場合にcerebellar diaschisisが生じ、その多くは慢性期まで持続するものと考えられた。

4. 動注塞栓療法前後の肝予備能評価における $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA シンチの有用性

杉原 正樹 毛利 勇生 杉村 和朗
(島根医大・放)
棕本 英光 和田裕美子 黒田 弘之
(松江生協病院・放)

〔対象〕動注塞栓療法(治療域が右葉左葉にまたがらないもの)を行い、治療前後に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -GSA シンチを行った肝細胞癌15症例、TAE群8症例、TAI群7症例。動注塞栓内容：TAE群は 2.0 ± 0.9 区域にlip-ADR 3.5 ± 1.4 ml 注入、塞栓区域は 1.3 ± 1.1 区域、TAI群は 2.1 ± 1.3 区域にlip-ADR 3.0 ± 1.0 ml 注入。〔方法〕ROIを心および肝全体、肝右葉、左葉に設定し、LHL15、区域LHL15を求めた。〔結果〕1. LHL15はTAE群でも、TAI群でも治療前後で有意な変化を

示さず、ICGの値と相関($r = -0.73$)した。2. TAE群はTAEを行った側の区域LHL15が低下したが、TAEを行わなかった側の区域LHL15が上昇し肝全体のLHL15は変化しなかった。TAI群では動注を行った側も行わなかった側もそれぞれ区域LHL15は変化しなかった。

5. 胆石症治療選択における胆道シンチグラフィの有用性について

中西 敏夫 田妻 進 谷口 金吾
伊藤 勝陽 (広島大・放部)

胆嚢結石症で体外衝撃波結石破碎治療を実施した症例に、Tc-PMTを用い胆道シンチより肝・胆嚢生理機能を検討した。胆道シンチはPMT投与後60分にセルレイン投与し肝、総胆管、乳頭部、胆嚢にROIを設定し解析した。解析項目は、肝摂取率、肝排泄率、総胆管流入・排泄速度、胆嚢駆出率、胆嚢内流入速度を結石消失例と非消失例で比較検討した。結石消失例では非消失例に比べ胆嚢機能を示す胆嚢駆出率および胆嚢内流入効率で差を認め、胆石症治療選択に胆道シンチグラフィは有用と考えられた。

6. 小児領域における腎シンチグラフィの検討

高野 勝之 久米 典彦 西垣内一哉
菅 一能 小池 晋司 松永 尚文
(山口大・放)

新生児を含めた小児は、未発達な腎濃縮能のためにレノグラム上、正確な尿路開存性の評価が困難な場合がある。利尿剤投与による強制利尿の有用性を片側性水腎症9例にて検討した。補液下に $^{99\text{m}}\text{Tc}$ -DTPA (741～10 MBq)を静注後、10分から20分後に利尿剤10 mgを静注した。利尿剤静注直前の腎全体のカウント数を1とし、10分後と20分後のカウント数の比を求めた。健側腎では9例中7例で10分後に30%以上の排泄増加が認められ、患側腎では9例中6例で20分後でも30%以下の排泄増加にとどまった。患側腎では6例で利尿剤に対する反応が認められず、尿路閉塞の存在が疑われた。

小児での利尿剤負荷レノグラムは、簡便かつ短時間に定量的に尿路通過状態を評価するのに有効であることが示唆された。